気管切開児の退院移行支援・地域連携の推進
―医療的ケア技術修得のための　モデル教材の開発と活用―

渡邉 理恵 氏

久留米大学　医学部看護学科　講師

現在医療的ケア児は全国に約1.8万人と推計され、0～19歳の人工呼吸器装着児は2,126名(2013年社会医療診療別調査)と約8年の間に10倍近く増加している。医療的ケア児とは、①気管切開がある　②痰の吸引が欠かせない　③人工呼吸器をつけている ④在宅酸素療法を受けている　⑤胃や腸などから経管栄養を受けている等の状態の児童である。医療的ケア児の退院移行は、家族の技術の修得が大きな課題といわれている。また、国は児童福祉法の一部を改正し、地方公共団体に医療的ケア児が各分野から適切なケアを受けられる体制整備を求めている。つまり、家族の医療的ケアの修得だけでなく、福祉・保育・教育等の児に関わる様々な分野の人々がケアを修得し、児の育ち・生活の質を保証するケアの充実が求められている。医療的ケアの中でも、特に生命の維持に直接関わる気管切開の管理は、技術の修得が大きなハードルとなっている。しかし、様々な事業所や教育機関などで活用できる気管切開の管理・ケアを修得するための教材はない。そのため、多職種が実践的に連携するツールがほとんどない状況と言える。そのため、今回連携ツールとしての気管切開モデルの開発に取り組み、そのツールの活用により退院移行を促すことができるのか、退院後様々な活動に児の参加を促すことができるのかを検証する。つまりモデル開発により医療・福祉・教育の専門職間における連携が実際的に活発化する事を目的とするものである。また本研究は、厚労省が平成28年に発信した「医療的ケア児の支援に関する保健・医療・福祉・教育等の連携の一層の推進」を具現化できる一つの有用な研究であると考える。